

ART KISS LETTER

vol.53

FREE

[アート・キッスレター]

FOR KUMAMOTO ART PEOPLE
Contemporary Art Museum, Kumamoto

熊本市現代美術館発行 <http://www.camk.or.jp>

SUMMER
[2011.夏号]



ファッション 時代を着る展展示風景
撮影：宮井正樹

巻頭言 ファッションの王道、それを支える変革の精神

熊本市現代美術館館長 桜井武

ファッションの歴史はアートとつながり、女性の歴史であると同時に、男性の歴史であったともいえる。衣服は身体を保護し、被い、隠し、そして露わにする、という複雑な人間の心理を伴ってきた。ファッションは皮膚に最も近いアートであるだけに、その歴史は様々な読み取りが可能である。今回の熊本市現代美術館での展覧会は、ファッションの歴史を、20世紀初めから現代までの一世紀にわたるスパンで捉えようとするものである。ファッション展と言えば、尖鋭なテーマ性に基づくものや、特定のデザイナーに光を与えるものが多いが、私たちの企画は歴史展である。通観することにより、ファッションがその前後の歴史とどう結びつき、その歴史性と高い芸術性のより深い理解が得られる、と考えたのである。服飾デザイナー(クチュリエ)とは、オートクチュール草創期のC・F・ウォルトやポール・ポワレ等によって、「創造的な活動をする者」と位置づけられてきた。アートの歴史と同様、ファッションのダイナミックな展開を支えて来たのは、ラディカルな問題提起をする新しいデザイナーたちであった。それは本流のパリで、しばしば外国人によって提示されてきたのが興味深い。その最たるものは、変革の起爆剤となった美意識を根底にもつ日本や、伝統的気品と過激さを併せ持つイギリスのデザイナーたちであった。例えば三宅一生、川久保玲、山本耀司、そしてマックイーンやガリアーノ等。彼らは衣服や着ることの根源的な意味を問い、素材にこだわった。その問いかけが素朴であるだけに、変革の力は強まる。「生地はすべてだ。それに耳を傾け、待て。そうすれば生地が何かを語り始めるだろう」と山本耀司は語る。彼等変革者たちが発してきたメッセージは、現在、その光をますます強めている。

熊本県現代美術館の活動

MUSEUM INFORMATION

「水・火・大地展」関連イベント 「土」のワークショップ

2011.4.29&5.3

第1弾 マグカップを作ろう

2011.4.29

「土」のワークショップ第一弾として、季節の植物を型押ししたマグカップを作りました。今回は、手びねりで形成した後、季節の植物を型押しして、白化粧で装飾を施しました。参加者の皆さんはじっくりと土と向かいながら土を積み上げ、最後は新緑を貼りつけてカップに彩りを加えると思わずにっこり。オリジナルの素敵な作品が完成しました。(M.O)

【参加人数：9人】

第2弾 色ガラスと土を使ったおしゃれなレリーフ作り

2011.5.3

第2弾は、壁掛けやアクセサリ置きにも使えるレリーフを作りました。作業は色鉛筆を使って出来上がりのイメージを膨らませるところから始まり、板状の粘土に各自モチーフの彫り出し、最後に色ガラスを入れるという手順で行いました。参加者の方のモチーフは海、蝶々、バラにトランプ模様やリングや教会と、多種多様で素敵なものばかり。焼成後、色ガラスとして使用したワインや焼酎の瓶を砕いた粒がキラキラと、とてもキレイに仕上がりました。(C.T)

【参加人数：13人】



プレママ&ファミリーツアー

2011.5.14

「水・火・大地」展のプレママ&ファミリーツアーを行いました。今回の展示は、水あり葉っぱあり石ありと、まるで公園のなかを散歩しているよう。参加してくださった皆さんも、リラックスした雰囲気楽しんでいただけたようです。毎日の家の近所のお散歩でも、ゴールズワージーになった気分、色んな発見や遊びをしてもらえたらと思います。(A.S)

【参加人数：10人】

浅井裕介アーティスト・トークとウォールアートフェスティバル イン ニランジャンスクール 2011 報告会

2011.6.12

「水・火・大地」展最終日に出品作家の浅井裕介さんのトーク、また浅井さんも参加したインドのウォールアートフェスティバル イン ニランジャンスクール 2011 の報告会が開催されました。第一部では浅井さんのこれまでの活動や、阿蘇や天草に出かけて、熊本に触れて生みだされた本展のための作品の制作過程についてお話し頂きました。また第二部では Wall Art Project のおおくにあきこさん、浜尾和徳さん、またフェスティバル出品作家の遠藤一郎さんとともに、インドの小学校での今年のプロジェットの活動内容を写真とともに紹介して下さいました。(Y.H)



【参加人数：70人】

「ファッション 時代を着る展」がはじまりました

2011.6.25-9.4

本展は、京都服飾文化研究財団(KCI)との共同事業として、同財団の全面的な協力を得ることにより、その世界に誇る貴重なコレクションのなかから、ドレスをはじめコルセット、靴など約100点を厳選し、20世紀初頭から現代におけるファッション史を通覧するもので、九州では初のファッションを主題とした展覧会です。

開会式では、matohu(まとふ)の堀畑裕之さんが、「今回出品されている1点1点は、それぞれのデザイナーが、時代のタブーや常識に挑戦して作り上げたものです。ですから本展は、デザイナーたちによる、人間の挑戦の歴史を紹介するものでもあるのです」という感動的なメッセージをくださいました。本展を通じて、ファッションに表れた各時代の美意識とその表現をお楽しみください。(H.T)



深井晃子(KCI チーフ・キュレーター)講演会

2011.6.25

「ファッション 時代を着る」展開催を記念して、京都服飾文化研究財団(KCI)理事でありチーフ・キュレーターの深井晃子さんによる講演会を開催しました。

今回のファッション展のほとんどの出品作品は、KCI所蔵であること、また、ファッションの歴史に関して、深井氏は第一人者であり、その講演会ということで、会場は立ち見ができるほど観客のみなさんと満員となりました。

講演会は、KCIのこれまでの活動、今回のファッション展の内容、20世紀初頭から現代までのファッションを軸に、その世相との関わり、時代ごとの美意識の変化との関わりについて紹介する、大変興味深い内容でした。2時間近い講演でしたが、観客の皆さんはメモなどを取りながら真剣に耳を傾けている様子でした。(H.T)

【参加人数：130人】



桜井武館長「イギリスとファッション」講演会

2011.7.3

「ファッション 時代を着る」展の関連イベントとして、CAMK レクチャーカレッジ 桜井武館長講演会「イギリスとファッション」が行われました。

講演会では、なぜ今年ファッションの展覧会が当館で開催されたのかという流れ、ロンドンやNYでファッションの大変意味のある展覧会が現在行われている事の紹介、イギリス出身のデザイナー、ジョン・ガリアーノとアレクサンダー・マックイーンにみられる、一種のジャポニスム的な傾向などを紹介しました。また、イギリスの競馬「ロイヤル・アスコット」にみられる多様な帽子や、ロンドンの帽子デザイナーのフィリップ・トレーシーの作品を紹介しながら、ファッション全体に通底するその造形への意識の高さと強さについて言及しました。(H.T)

【参加人数：60人】



matohu「慶長の美」展がはじまりました

2011.6.25-9.4

「ファッション 時代を着る」展出品作家でもある、堀畑裕之さんと関口真希子さんによる matohu(まとふ)のミニ展示が井手宣通記念ギャラリーで行われました。まとふがテーマとする「慶長の美」とは、日本の慶長期に花ひらいた豊かな美術作品をモチーフとして、5年間、10のテーマを設定し継続して制作されてきたものです。

日本の着物の「長着」に、織部や志野、辻が花といった伝統的な職人による技術が合わせられ、短いサイクルで消費されるファッションとはまた異なるアプローチをしていることが特徴です。今回は、作品の制作過程を示すビデオや、素材道具などをあわせて展示され、試着コーナーも設けられるなど、まとふの持つ独特の世界観を楽しめる内容となりました。(AS)



熊本ゆかりの画家坂本善三(1911年熊本県小国町生れ、1987年熊本市にて死去)の生誕100年を記念して、「坂本善三展－パブリックアートから見た坂本善三」を開催しました。展覧会では、熊本市が所蔵する熊本市庁舎に関する下絵などの作品とその前後に描かれた一連のシリーズに加え、坂本善三美術館のコレクションより同時期に描かれた作品を紹介しました。また、熊本市所蔵の油彩画、評価が高まった時期に制作された水彩やリトグラフを展示することで、坂本善三の公共空間における作品のあり方を探るとともに、熊本ゆかりの画家、坂本善三のこれまでの軌跡を辿りました。(A.A)



くまもとアートな街歩き 坂本善三編

2011.5.20

坂本善三による熊本市庁舎のパブリックアートをめぐる街歩きを行いました。展示室に集まり、簡単なあいさつとギャラリートークを行った後、まずは熊本市役所14階ホールの緞帳を見にスタートです。会議等でしか見ることのできない緞帳を、下絵と比べてみると、座った際の目線の高さや、サインの位置など、公共空間ならではの工夫を感じることができました。また、眺めのよい展望スペースから、坂本善三をはじめ様々な作家が描いた熊本城の絵を見比べて一休憩しました。

その後、2階にある壁画、1階吹き抜けにあるレリーフを鑑賞。その場にたってみると、吹き抜けにある柱、床のタイルとの色合いがよく考えられており、作品そのものが主張しすぎることなく、自然な調和をみせていることが実感できました。最後に、参加いただいた坂本善三美術館学芸員の山下さんのお話もいただき、善三作品をきっかけにベテランから若い方まで、和やかに交流することができた街歩きとなりました。(A.S)

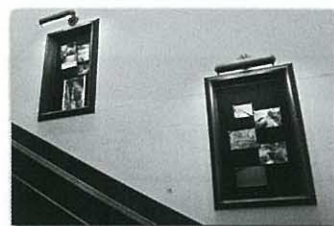
【参加人数：12人】



階段ギャラリー「わたしの江津湖をさがす」参加者作品展

2011.5.21-6.26

G3企画展示「稲原豊命 写真展 サイクルー環の江津湖」関連イベントとして開催されたアート・ツアー「わたしの江津湖をさがす」の参加者のみなさんの作品展示を行いました。稲原さんの好きな撮影スポットを紹介してもらいながら、それぞれの目線で作品を撮影。江津湖の水と緑の多様な表情をそれぞれの感性のもとで写し取った力作をご紹介します。(H.T)



明後日朝顔プロジェクト2011 元気な朝顔が咲いています

2011.6.13

アーティストの日比野克彦さんが行う「明後日朝顔プロジェクト」に参加して今年で5年目。キッズサロンの窓からは、立派な葉をつけた朝顔が美しい緑のカーテンを作っているのが見えます。昨年よりも大きくたくましい朝顔は種植えから約1ヵ月で可愛らしい花を咲かせました。スペースシャトルに乗って1週間宇宙を旅した『宇宙朝顔』の二代目も元気に育っています。(Y.M)



命の花壇 夏のお花の植え替えをしました

2011.5.24

今年も熊本県立熊本養護学校農芸班の皆さんが命の花壇の植え替えに来てくださいました。お花はラベンダー、マリーゴールド、インパチェリス、サルビア、ペチュニアと、色とりどりのお花です。ひとつひとつ丁寧に育てられたお花はどれも元気いっぱい。これから咲きはじめるつぼみもたくさんありますので、夏に向けてよりいっそう華やかな花壇となりそうです。農芸班の皆さんありがとうございました。(C.T)



第90回

2011.5.26

今回のテーマは「熊本の水・火・大地」。飛び入りの方2名を含めた13名の方が自作の詩等を発表されました。展覧会「水・火・大地」を観覧して、杉本博司やアンディ・ゴールズワージーからインスピレーションを得た方や、東日本大震災から思うところをテーマにした方、阿蘇や、不知火海、水前寺の豊かな水の記憶などをテーマにした方など、非常に幅広い展開がみられました。どの方にも共通してみられたのが、「それでも再び生まれ出る」ということを思わせる、明るいメッセージで、惨事を読んだ詩であっても、ひとつほっとするものを感じました。(H.T)

第91回

2011.6.23

6月のテーマは「うさぎ(兔・卯)」, 14名の方が発表を行いました。朗読会では、うさぎ狩りをしたふるさとの思い出や、世相を表現したものの、また、うさぎと、卯年に生まれた自らの人生を重ねて表現された方もいました。多彩な広がりを見せる「うさぎ」の詩、心に残る朗読の夕べとなりました。(M.O)

CAMK「読みがたり」

2011.4.16 & 5.21

第20回

2011.4.16

テーマは「大地のおはなし」でした。会場にはアフリカンな布地をあしらひ、読み手のボランティアさんも素敵な衣装で登場。ビッグブック『ぴっけやまのおならくらべ』では、つるさんの「きれいなおなら」、ねずみちゃんの「ポポポポとつづくおなら」、くまさんの「大きなおなら」、スカクくんの「くさ〜いおなら」などタイプのちがうおならの音に、両手で口を押さえて笑う子どもの姿も。しめくくりには、折り紙のタンポポをみんなで飛ばして遊びました。タケコプターのようにくるくと回転して落ちていくお花に夢中の子どもたちでした。(C.T)

【参加人数：18人】



第21回

2011.5.21

今回のテーマは「火のおはなし」でした。「ろうそくのうた」で自分の指をろうそくに見立てて吹き消すところから始まり、『まっくらまっくら』『ろうそくいっぼん』などの絵本、『かちかちやま』の紙芝居を親子で楽しんでいただけたようです。(E.Z)

【参加人数：15人】



ミュージック・ウェーブ No.047~No.049

2011.5.7 & 5.8 & 6.11

No.047 古楽アンサンブル・コンサート

2011.5.7

古楽器アンサンブルグループ『葦』をお迎えして、古楽器による演奏と歌のコンサートを開催いたしました。ルネサンス後期に流行した、和音の繰り返しによるオスティナートの曲を中心に、中世、ルネサンスの大胆かつ優雅な曲と歌を披露してくださいました。

また、なかなか触れることのない珍しい古楽器の紹介についてもお話いただきました。会場全体が中世、ルネサンス時代にタイムスリップしたかのような、素敵な体験ができる午後となりました。(A.A)

【来場者：90人】



No.048 邦楽コンサート～和の音色～

2011.5.8

第17回くまもと全国邦楽コンクールの記念コンサートとして、「邦楽コンサート～和の音色～」を開催しました。琴、尺八をはじめとする和楽器による5曲が演奏されました。日本の伝統が培ってきた美しく重厚な音色に、来場者の皆さんもじっくりと耳を傾けておられました。(A.A)

【来場者：60人】



No.049 ボサノバ・デュオ リマー

2011.6.11

長崎県在住のボサノバ・デュオ、リマーの河本美穂さん(ヴォーカル)と山本里麻さん(ギター)によるコンサートを開催しました。コンサートでは、ブラジルの素朴な美しさを唄った「三月の水」、ボサノバがアメリカに渡り世界的に有名になった「イパネマの娘」、広大な大地や塩田をイメージした「ミナス・ジェライス」、「塩の歌」など11曲が演奏されました。ボサノバの音色の背景にあるブラジルの豊かな自然や文化が、展覧会のタイトル「水・火・大地」とも響きあう素敵なコンサートになりました。(M.O)

【来場者：80人】



ART de Gyan!

[アート・ド・ギャン]
熊本弁で「アート、どう?」の意です

[展評]

熊川 南 書作展

2011.3.1～3.6 熊本県立美術館・分館ギャラリー
熊本市千葉城町2 096-351-8411

平成15年から3年間、熊本市立必由館高校の芸術科書道コースで学び、福岡教育大学「生涯スポーツ芸術過程芸術コース書美領域」(旧体制の特設書道科)に進学して、書道の研鑽を積んだ熊川南が挑んだ「卒業制作個展」である。彼女の必由館時代の2年間関わってみて、福教大の「書美領域」に行ける生徒だと期待していた。彼女は進学出来たのみか、福教大の3年次に中国雲南省の白水台に遊び、「東巴(とんば)文字」(雲南省に残された古代文字)に触れる機会に恵まれ、更に浙江省(杭州)の中国美術学院に留学して徐銀森教授に学んで帰国した。卒業制作個展は、学生らしく専門教育で学んだ書道の幅広い領域を網羅しながらも、一つには中国で学んだ貴重な勉強が生かされた「東巴(とんば)文字」の臨書と紹介、二つには福教大のゼミの先生の中廣い指導力が良く見える内容になっていたのが大きな特徴になっていると思えた。則ち、篆刻・刻字・大胆な臨書のあり方など。つまり、熊川はすでに吸収力を持って学んで来たことを、この卒業制作展で証明してくれたと喜んでいる。(T.M)

第1回 熊本県文化懇話会フラワーデザイン部門作品展

2011.5.11～5.17 鶴屋東館8階ふれあいギャラリー
熊本市手取本町6番1号 096-356-2111

文化懇話会のフラワーデザイン部門誕生を記念した作品展が開催。「誕生」をテーマに前期17名、後期16名の作品が出展されていた。枝の動きを利用したうねるような造形が目目をひく作品や、葉のやわらかい質感を生かした作品など個性あふれる作品を親子で観ている姿が印象的だった。(E.Z)

勅使河原茜家元継承10年記念 熊本支部 草月いけばな展(花遊々)

2011.5.25～5.30(前期5.25～27、後期5.28～30) 鶴屋東館7階鶴屋ホール
熊本市手取本町6番1号 096-356-2111

勅使河原茜家元継承10年記念として、熊本支部による草月いけばな展(花遊々)が開催。庭園を見てまわるような感じで鑑賞してほしいという会場は、熊本のいけばな展にしては珍しく低い壁で構成されていて新鮮だった。花が挿してない花器がおもしろいアクセントになっているなど、視線の高さがいつもと違うだけで花の表情が違って観える空間になっていた。(E.Z)



梅雨を楽しむフラワーアレンジ作品展

2011.6.11～6.13 お菓子の香梅 帯山店
熊本市帯山7丁目6-84 096-381-8681

梅雨を楽しむというテーマに沿った、この時期ならではの色とりどりの紫陽花が会場を華やかにしていた。子どもたちが童話の世界を表現した作品も展示されていたが、観に来た子どもたちが実際にアレンジに挑戦してみたいと申し出ていて、このように子どもたちが花とふれあう機会をもっと増やしていきたいと思った。(E.Z)



東日本大震災チャリティ書作品展

2011.6.14～6.18 熊日びぶれず会館6階熊本公徳会ギャラリー
熊本市上通町2-31 びぶれず熊日会館6階 096-327-2600

県書道連盟(平方研水理事長)は、今回の東日本震災の復興救済の為にチャリティ書作品展を熊本公徳会ギャラリーで開催した。県書道連盟幹部役員と選抜会員51名が、漢字、かな、調和体、一字書など62点を軸や額等で展示された。山頭火の句や、与謝野晶子の歌に菜根譚の一節など、多彩な作品群となっていた。全益金30万円は全額熊日を通して寄付された。(S.K)



第30回 熊日新鋭書道展

2011.6.21～6.26 熊本県立美術館本館
熊本市千葉城町2-18 096-351-8411

熊日創立40周年を記念して、若手の発掘や書道の裾野拡大等を目的に毎年開催されている。審査は、県書道連盟の幹部役員7名によってなされた。漢字、かな、近代詩文書、大字書、篆刻の6部門である。317点の応募の中から、グランプリの熊日新鋭賞に漢字の柿本浩美(人吉市)さんが選ばれた。特選14名、準特選65名、秀作80名の作品が、額や軸で展示された。書風、書体はそれぞれ個性的であり、多様であった。特に高校生や大学生の作品は伸びやかで、新鮮な感じを受けた。(S.K)



現代を問い直す 平田美子・油絵遺作展

2011.6.29～7.3 ギャラリーかみとお
熊本市上通り町8-14K シードビル2F 096-212-5300

50歳から73歳までに描き上げた平田美子さんの油絵遺作展。本会場ではたくさんの作品の中から夫・信次郎さんがお気に入りのものを12作選んでの展示。時代の重苦しさや現代への問いが込められた作品が並ぶ。灰色の少し厚めのベースに部分的に覗く鮮やかな赤、青の色彩が印象的だ。作者は高校時代に油絵の基礎を習ってからはいったん制作と離れるが、描きたいという気持ちはずっと持っていたという。実際に絵具やキャンバスを買いそろえて帰宅した際に信次郎さんは驚いたそうだが、妻の描く絵に魅力を感じ、良き理解者であり賛同者であり、パートナーとなった。絵画と共に添えられているコメントは作者自身のもの、二人で話していたこと、美子さんが亡くなられた後に信次郎さんがその思いを次いで書き記されたものであった。(C.T)



SUOTO TO KUMAMOTO

CAMKフレンドインタビュー *今年度は熊本の次世代文化を支える人々をご紹介します。 [スイトット・クマモト]

4月29日から7月31日まで、中心市街地で開催された「熊本まちなか美術館」。
このイベントの実行委員長である Gallery Collection OMO の大森健弘さんに今回のイベントについてお話を伺いました。

「熊本まちなか美術館 vol.2」について教えてくださいー

熊本中心部の7つの商店街と在熊の企業で組織する「すぎたい熊本協議会」がこのイベントの主催です。私も商店街で美術に関わる一人として、美術でまちの活性化を目指して取り組んでいます。今年でこのイベントは2回目になりますが、新幹線も開通しましたし、昨年よりも規模を拡大させて5つのプロジェクトを考えました。

どのようなプロジェクトですかー

まず一つ目は、中心市街地のホテルやデパート、その他店舗26カ所に、「バングア」という熊本の若手作家グループの作品を展示する「ショーウィンドー美術展」、二つ目は、「百貨店の懸垂幕で制作した作品展示」、三つめは「サンクスレタープロジェクト」、四つ目は熊本市の小中学生による「アーケード吊り下げ看板」、最後は、「熊本まちなかフォトコンテスト」(7/20～7/31まで当館に展示しました!)です。

大切なことは、商店街の人達とコミュニケーションを図りながら一緒に展覧会を作っていくことです。作家と私だけでは絶対にうまく行きません。低予算でも、作品のクオリティは高く、地元根付いていて、一般市民の方にも理解して参加してもらえるような形で美術展をしていきたいと考えています。

それで今回は、単に回るだけではなく、商品券が当たるスタンプラリーを作りました。知らないお店にも立ち寄ることで新しい出会いがありますよね。商店街の人達の反応も良く、自分達でスタンプラリーを回ったりもしていますよ。(笑)

今回のようなアートイベントを通して、これからどのような変化を期待しますかー

アートでまちを活性化するイベントは各地で行われていますが、商店街で美術に携わる者として、美術に何ができるのか、ということもいつも考えていましたので、今回、このようなイベントは良いチャンスだと思いました。今後続けていくことで、熊本でのこのような活動を広く知ってもらって、県外からもお客様がいらっやればそれは嬉しいことです。数年後、答えが少しずつみえてくるのかなあと思っています。

それに、県内だけに拘らずに福岡、鹿児島との連携を視野にいれて取り組んでいます。お互いに行き来をして、つながりを広げて活動していけば、九州全体のアートマップが作成できるような、同時企画の試みもできると思います。

現代美術館とやってみたいことはありますかー

美術館と商店街や若手の作家たちが互いに歩み寄るような形で、テーマを決めて展覧会に関するシンポジウムなんかができたらいいですね。美術館と商店街がもっと交流を深めていくことを期待していますし、また、皆で一緒になってこの熊本の地をアートで盛り上げていけるように進化してゆけたらと思っています。



造形作家の今田淳子さんの作品と一緒に

VISITOR'S LETTER

[来館者のみなさんからのメッセージ]
アンケートに寄せられた感想(抜粋)を紹介します。

水・火・大地 創造の源を求めて展

- 火や石、土、雪など様々な素材を用いた繊細なあるいはダイナミックな作品に国境を越えた同時代性を感じました。(30代、女性、福岡県)
- 現代アートと聞くと、メディアアートなど技術的なアートを想像しがちだったのですが、時代を逆行するような自然のままのアートを見ることができ新鮮に感じました。同時に「アートとは何か?」という問いについて、さらに深く考えるきっかけともなりました。(20代、女性、福岡県)
- フロア全体が、水・火・大地と調和した雰囲気です。リフレッシュできました。(40代、男性、熊本市内)

編集後記

ふと思いついて、ずっと気になっていたキルケゴール『死に至る病』を読み始めました。絶望とは何であるかを丹念に解きほぐしその本質に向かう作業に読者として延々とつきあい続けるといった読書体験の最中ですが、不安感というものを整理し見つけ直すには非常によい示唆を与えてくれました。また、この延々とつきあうという作業を通じて、理解というものはそういう長い時間を必要とする、という当り前のことを改めて実感しつつあります。

編集長 富澤治子

この度、九州初上陸のファッション展を広く告知すべく、ついに当館もツイッターをはじめました。当館のマスコットの存在、キャンクマが日々美術館のことをつぶやいていますが、利用者のみなさんのリアルタイムな声をスタッフ皆励みにしています。キャンクマのつぶやきで、現代美術館をより身近に感じていただければ嬉しいです。(アカウントは camk_kumamoto です。)

担当 大岩みゆき

●発行元/ART KISS LETTER アート・キッス・レター Vol.53 2011年8月発行(夏号) ◎無料◎

●発行人/桜井 武 編集/富澤治子、大岩みゆき

●デザイン/(有)松永 壮デザイン事務所 ●印刷/シモダ印刷

●発行/熊本市現代美術館 〒860-0845 熊本市上通町2-3 TEL.096-278-7500 FAX.096-359-7892

●執筆者一覧
*キャラクター取材原稿の文末にイニシャルにて記載しております。

兼城昌山
Syozan Kaneshiro (書道家)
森山淡草
Tanso Moriyama (書道家)
本田代志子
Yoshiko Honda (熊本市現代美術館主任学芸員)
藏座江美
Emi Zoza (熊本市現代美術館主任学芸員)
富澤治子
Haruko Tomisawa (熊本市現代美術館主任学芸員)
坂本顕子
Akiko Sakamoto (熊本市現代美術館主任学芸員)
芦田彩葵
Aki Ashida (熊本市現代美術館学芸員)
大岩みゆき
Miyuki Oiwa (熊本市現代美術館学芸アシスタント)
藤本真帆
Maho Fujimoto (熊本市現代美術館学芸アシスタント)
高橋知江
Chie Takahashi (熊本市現代美術館学芸アシスタント)
村上由起
Yuki Murakami (熊本市現代美術館総務スタッフ)

WORLD NEWS

春のニューヨーク アート日より



ニューヨーク近代美術館前

4月下旬のニューヨークはまだ少し肌寒かったが、街では梨の木が満開の花を咲かせ、春の訪れを告げていた。

ニューヨーク近代美術館(以下MOMA)では、「抽象表現者たちのニューヨーク」展が開催されていた。この展覧会は、MOMAのコレクションのみで構成され、リニューアルオープン以降4階部分全てのスペースを使用する大規模な展覧会だ。国際的な評価を得て、初めてアメリカ独自の美術を確立したとされる抽象表現主義は、1950年代に隆盛を極め、その登場によって、ニューヨークをアートの中心地へと導く重要な役割を果たしたが、その発展はMOMAの歴史と密接な関係にあったともいえる。MOMAは、抽象表現主義の作家たちの各時代の作品を収蔵し(無論作家たちからの積極的なアピールもあった)、展覧会を企画するだけでなく、ヨーロッパ諸国に積極的に彼らの展覧会を巡回させるなど、アメリカ美術の発展に大きく貢献してきた。

本展を企画したのは、昨年、絵画・彫刻部門のチーフ・キュレーターに就任したアン・テムキンだが、彼女はかつてフィラデルフィア美術館で抽象表現主義の重要な画家ニューマンの個展も開催しており、抽象表現主義への造詣は深い。今回はテムキン率いる新体制のもと、250点にも及ぶ絵画を、MOMAのアーカイヴと図書室が管理する貴重な資料や写真とともに展示することで、今一度、半世紀前に登場したアメリカ美術のバイオニアたちに光をあてるだけでなく、常に時代を先取りし、アート発信の拠点であり続けてきたというMOMAの自負と存在意義を示すものであったともいえる。

豊富なコレクションからは、キュビズム、シュルレアリスムの影響下にあった作風から、抽象表現主義の特質とされる、作家の行為を想起させる激しい筆触のアクション・ペインティングや、色面の拡がりかカンヴァスを満たすカラーフィールドへと至るまでの変遷を堪能することができる。導入では、ヨーロッパ美術の動向をニューヨークに広めたホフマンと、アクション・ペインティングの画家として知られるポロックのドリップング絵画を並べて展示することで、双方の関係性が顕著に浮き彫りにされ、マザウェルの初期の作品ではキュビズムの要素が読み取れる。シュルレアリスム風から抽象表現主義の独自性へと転換していく重要な作品を残したゴーカーの作品も、まとめて広い空間でゆったりと見ることが出来る。

ニューマンとロスコの作品は、抽象表現主義の変

遷を辿るために、会場内に点在しているものの、彼らのみの作品を展示する各部屋が設けられ、作品と対峙し、その世界観にじっくりと浸ることができる。出品作家のなかには、ネヴェルソンやフランケンサラーのように、いわゆる抽象表現主義にはくられない作家も含まれていたが、かえってその周縁性や、当時の抽象表現主義という用語だけではまとめられない多様な表現や方向性が提示されている。展示の終わりには、ロスコのブラック・ペインティングが展示されている。解説には、本作が制作された60年代後半に流行していたミニマル・アートからの影響が露呈された作品と記されているが、それもニューヨークのアートシーンの移ろいを見つめ続けてきたMOMAの視点だろう。ポロック、ニューマンらの代表作から、普段の常設展示では滅多に見ることのできないロスコのマルチフォーム様式の作品までを一堂に会した展示には、質、量において圧倒されるものがあった。そのスケール感とエネルギー溢れる作品からは、大陸アメリカの広大な自然と、戦後世界をリードした大国アメリカの勢いを垣間見ることが出来る。

今回は、資料も多く展示されていたが、それらを管理・保管するアーカイヴの重要性は大きい。というのも彼らは自らを「抽象表現主義者」と語ることはせず、グループを形成して特定の芸術運動を起こすというよりは、緩やかな理念で結ばれていた。残されたステートメントや手紙、写真類は、その背景を多く語っている。現在当館のフリースペースでは、斎藤義重の作品を展示しているが、彼がMOMAのグループ展に参加した際のオープニング出席に関するキュレーターとの細かい遣り取りも残され、その記録姿勢は一貫している。アーカイヴは予約制で希望した資料を見ることが出来る。また隣接する図書室では、訪問時間を予約すれば、これまでMOMAで開催された

展覧会のカタログや貴重な本を読むことができる。ちょうど展示棟の向かい側に立ち、窓から鑑賞者の様子や中庭を眺めることができる気持ちのいいスペースだ。

ジャパン・ソサエティーでは「バイバイキティ!!!」が開催されていた。こちらは、「カワイイ」に集約されやすいニッポン文化ではなく、日本が抱える心の闇や美意識に焦点をあて、現代美術を捉えようとした展覧会。出品作家は、現在活躍する日本の現代美術家たちで、会田誠、やなぎみわ、小谷元彦、さわかひらき、塩保朋子ら総勢16名。会場最後に展示された奈良美智のキティをモチーフにした作品が印象的であった。ちなみに、この展覧会に出展されていた小谷の「SP extra 畸形脳面集」は、当館でこの秋開催する「小谷元彦展 幽体の知覚」でシリーズ全点を展示予定である。型と表面性が追求され、日本特有の優美さが凝縮された能面に、筋組織や骨格といった生身の現象が浮かび上がるという大変ユニークな作品なので、ぜひ会場で実見していただきたい。

ニューヨークのギャラリーでは、ロウワーイーストサイドが活気づいており、フレッシュな作品を見ることが出来る。なかでも、ステファン・ストヤノフ・ギャラリーとリサ・クーリーはコンパクトなスペースを活用した展示が印象深かった。一方、チェルシーのギャラリー街では、アンドレア・ローゼン・ギャラリーで開催されていたデイヴィッド・オルトメードの個展が目をつけた。人工的なアクリルガラスのケース内には、淡い糸が羽衣のように美しく張り巡らされているが、近寄ってみると、蜂が飛び交い、蟻が列をなし、人間の鼻の部分だけが標本のように並べられている。人間の生理を刺激するファンタジックかつ生々しい不思議な世界が広がっていた。(A.A)



マーク・ロスコ展示風景



「バイバイキティ!!!」展入り口



アーシル・ゴーカー展示風景

ホームギャラリーからのお便り vol.7 LETTER FROM HOME GALLERY

前回に引き続き、今回もキッズサロンからおすすめの1冊をご紹介します。

「クラバート」 プロイスラー作 中村浩三訳 偕成社 1980年

ドイツの児童文学作家オトフリート・プロイスラーの傑作といわれる作品。少年の頃父親の蔵書の中にあつた「ドイツ伝説集」のヴェント人クラバートの伝説に強烈な印象を受けたプロイスラーは、その後20年以上もたってようやくクラバートについての物語を書く決心をします。当初ははかどったものの途中で行き詰まったプロイスラーがその間に執筆したのが「大どろぼうホツツェンプロツツ」シリーズ。「クラバート」が書けない時期がなかったらこの名作シリーズは存在しなかったかも?と思うと、読者である私達にとっては幸いだったともいえます。運命を暗示するような夢や奇抜な魔法は一見現実離れしているような印象を受けますが、物語にぐいぐい引き込まれてしまうのはプロイスラーの巧みな構成員のみならず、少年の頃からこの物語を書きたかったという強い思いが伝わるからかもしれません。個人的にはこれ以上の恋愛物語はないと憧れた作品でもある「クラバート」。最後の会話は何度読んでもきゅんとします。(E.Z)

